

アルンダティ・ロイ著

ゲリラと森を行く

本書は、ブッカー賞作家アルンダティ・ロイによる、インド内陸部で「毛沢東主義者」と呼ばれている人々のルポルタージュである。彼らは「アーディヴァーシー」とも呼ばれる先住民であるが、ボーキサイト採掘のために先祖代々住んでいた土地を奪われてしまったのである。

治を否定し独自のメディアを持たない毛派からのメッセージは皆無である。だから、毛派について知りたければ、現地に行って直接コソクトする必要がある。そして、見えない理由のもう一つは、彼らがわれわれの思考の限界に存在しているからである。無制限な欲望ならびに「成長」を前提とする資本主義文明を生きる人間ではボキヤブラリ

しかし、なぜわれわれは彼らを見えないのか。一つには、現実的な問題として、情報が制限されている。ロイによれば、鉱山会社などの大資本はメディアと政府

人間である。「本当のことを言う」とね、この問題は私ら警察にも、軍にも手に負えんのです。こいつら先住民の問題は、欲得を知らないと。連中が欲深くならないと、われわれには見込みがない。」

巨大なブーツ、または新しいモデルの可能性

吉 国 浩 哉

を巻き込んで毛派の暴力性を強調することによって彼らに対する暴力を正当化しているのは、「正直な人」

この境界の存在には二つの意味がある。一つは、「成長」神話が最終的に帰結する破壊である。それは誰もが目をそらしたい現実であり、それを抑圧・否認することが「対ゲリラ戦争」を含めてあらゆるレベルで行われている。つまり、彼ら

とまず読むだろう。

しかし、そのように単純な事情ならば、なぜロイは本書を書くために実際にチャッティースガル州ダンテワダの森に入り、「毛派」に直接会って話を聞かなければならなかったのか。それは、彼らが根本的には見



四六判・244頁・2940円
以文社
978-4-7531-0313-3



えに旧来の想像力では見えないのである。その意味で本書はロイがその未来を、「新しいモデル」を捉えようとする試みである。もちろん、このモデルはインドという境界に限定されるものではない。それは、アーディヴァーシーたちが伝統的な人間関係を破壊されたその後、前近代的な共同体への回帰でもないし、彼らの闘いが毛沢東主義よりも古いという意味で、(資本主義などの) 何かに対する対抗運動でもない。それは、それ自体で意味をもつ「ブーツ」として自らの足ですでに動き始めている。(栗飯原文子訳) (よしくに・ひろき氏) 東京大学大学院准教授・アメリカ文学専攻)

★アルンダティ・ロイ氏は作家。「小さきものたちの神」でブッカー賞受賞。その他の著書に「わがしの愛したインド」「帝国を壊すために」「民主主義のあとに生き残るものは」など。